

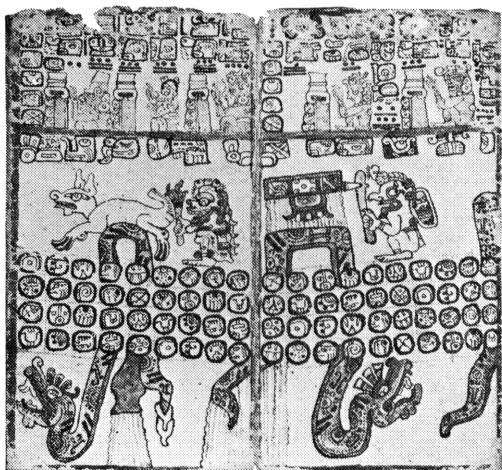
みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ文字を解く

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5555

二章 曆とアルファベット



マドリッド絵文書の260日曆の一部

ランダの『ユカタン事物記』

さて私たちの出発点は、十六世紀中葉にディエゴ・デ・ランダが書いた『ユカタン事物記』である。その書には解説の手がかりとなったマヤの月日の文字とその読み方や、ランダのアルファベットと呼ばれている二七の文字と音節的文字の例が三つ記されていた。それにより初期の解説者ブラシユール・ド・ブルブルやレオン・ド・ロニやサイラス・トーマスなどが解説をはじめたように、私たちもランダの『ユカタン事物記』からはじめることにしよう。

ランダの『ユカタン事物記』は、一八六三年にマドリッドで、ブラシユール・ド・ブルブルにより発見され、翌年出版された。『ユカタン事物記』には、マヤ文字解説の手がかりとなった暦に関する記述のほか、マヤの宗教や儀式、日常生活、ユカタンの風物や自然などの記述がみられるばかりでなく、スペイン人のユカタン発見や征服、教会の歴史などの記述もみられ、その書は当時のユカタンを知るに欠かせない資料となっている。しかしながら、ブルブルが発見し、出版したものは、莫大な量あったと思われるオリジナルの写本、それも一部分の写本にすぎなかった。原文は一五六六年頃、ランダがスペインに一時帰国したときに書かれたようである。残念なことに、その原本はみつかっていない。それゆえ、本書でこれからみる文字も、写本であることを十分に頭に入れておかななくてはならない。

ランダという人は不思議な人である。彼はインディオが保持していた書物や知識を邪悪なものとし、消し去ろうとしたと同時に、消し去ろうとしたそれらの知識やインディオの風俗、習慣に興味をいだき、『ユカタン事物記』として残るその本に、宗教や儀式、日常生活、ユカタンの自然や歴史などを記している。また、異端者を宗教裁判にかけて罰するおそろしき迫害者とみられていると同時に、飢饉に苦しむ難民を救済する聖者のようにもいわれている。おそらく両面をもっていたのであろう。一見矛盾した性格も、彼のファナティックともいえる一途なまじめな性格によるものと解釈したら、納得がいく。ともかくユカタンの多くのマヤ人が罰せられた。その際、ランダ自ら記しているように、焚書が行なわれたのかもしれない。彼はこう書いている。

一五六二年、マニで宗教裁判が開かれ、ユカタンの多くのマヤ人が罰せられた。その際、ランダ自ら記しているように、焚書が行なわれたのかもしれない。彼はこう書いている。

「我々はこれらの文字で書かれた本をたくさんみつけた。これらは悪魔の迷信と虚偽のほか、なものをも含まぬので、焼きすててしまった。そのため彼らはおおいに悲しみ、苦しんだ」

しかしこの一節はマニの宗教裁判に関するところではなく、文字に関するところに書かれている。実際マニの宗教裁判で本が焼かれたという記録はみられない。ランダ自らいうのであるから、本を焼いたことはたしかであろうが、マニの宗教裁判のとき焚書が行なわれたとする一般に流布している説は正しくないようである。一説によれば二七の書物が焼かれたという。もっともこの数は十九世紀に書かれたもので信用がおけないが、多くの絵文書が焼かれたことはまちがいない。

それらが現存していれば、マヤ文字の解読は、いまよりはるかに容易であったらう。失われてしまったことを嘆いていてもしかたがない。まずランダが残したもののうち、暦の文字からみていこう。

図5に示した文字は、それぞれ二六〇日暦と三六五日暦の文字である。これらはのちにみる絵文書と碑文のなかにある暦の文字と比べても、さほど変化していない。とくに二六〇日暦の文字はほとんど変わっていない。それゆえ暦の文字が容易に同定されたのもうなずける。

しかし、文字の読み方はそうはいかない。ランダはその当時使われていたユカテコ語の読み方を記しているにすぎない。ランダの時代と碑文が刻まれた時代とは、少なくとも七〇〇年近い差がある。碑文時代の読み方とランダの時代の読み方がおなじであるはずがない。このことに深入りする前に、二六〇日暦と三六五日暦とは、いったいどのようなものかをみておこう。

二六〇日暦

図6は二六〇日暦の碑文と絵文書の書体の一例である。図からわかるように多くは二つの書体をもっている。一つは人間または動物の頭を描いたものであり、もう一つは幾何的・抽象的な文字である。頭または横顔を描いたものを頭字体といい、幾何的な文字を幾何体ということにしよう。このようにマヤ文字の多くは二つの同価の書体をもっている。

260日曆



365日曆



図5 ランダの曆

二六〇日曆は、1から13までの数字と二〇の日が順次組み合わさってできる曆である。二〇の日の順は、イミシュ、イック、アクバル、カン、チクチャン、キミ、マニック、ラマツト、ムルック、オック、チュエン、エツプ、ベン、イシュ、メン、キップ、カーバン、エツナップ、カワック、アハウとなる。

この順に1から13までの数字が、とぎれることなく順次繰り返し返すので、二六〇の組み合わせ

せができる。つまり、二六〇日が一周期の曆となる。

数字と文字はけっして別々に用いられることはなく、たえず一緒に一つの単位として、すなわち一日を表わすものとして用いられる。だから文字だけを「日」

繪文書



文
頭字体



碑
幾何体



の文字と呼ぶことは適切ではないが、慣用に従い、これら二〇の文字を「日」の文字と呼ぶことにしよう。

たとえば、今日が1イミシュなら、明日は2イック、明後日は3アクバルとなる。一三日目は13ベンであり、それから1イシュ、2メンとつづく。二五九日目が12カワックで、二六〇日目が13アハウとなり、一周期が完了する。

この二六〇日が一周期となる曆には名前があったと思われるが、現在ではそれはわからない。

図6 260日曆



ティカルの神殿Iのリンテル3の一部。9アハウヤ11エツナップ、12エツナップを表わしている文字がみえる。

学者たちは最初アステカ名のトナルアマトルの名を与え、次にツオルキンと呼んだ。現在では、ツオルキンとかシヨクキンとかツオルカンとか、儀式的・宗教的性格が強いところから神聖暦とか呼ばれているが、本書では二六〇日暦と呼ぶことにする。

では、なぜ二六〇という数字が選ばれたのであろう。たとえば、妊娠の期間が二六〇日にあたるのでか、太陽が頂点から南へ行きまた頂点にもどる期間が二六〇日だから、とかいう意見が

あるが、実際のところはわからない。

マヤの天上界は一三層あり、一三の神が支配していたといわれるように、マヤでは一三は重要な数である。二〇も人間の手足の数と一致するためか、マヤ人が使っていた二十進法の単位として重要な数である。そういうところから一三とか二〇が選ばれたのかもしれない。だがこの暦は、マヤ人が用いるはるか以前から用いられていたのである。メソアメリカ全体にいきわたって

いるものである。だから、マヤの考えだけで判断するわけにはいかない。

ともかくこの暦が日常生活に重要な暦であったことはまちがいない。宗教儀式や日々の占が主題である絵文書は、二六〇日暦をもとにしているし、人は生まれた日により性格、将来が決まるという考え方があがるが、その占のもとになるのもこの二六〇日暦である。たとえばグアテマラ高地のキチエ族のあいだでは、8の猿の日に生まれた人は占師になれるという。このように、二六〇日暦は、日常生活とはきつてもきれぬものであった。いまでもこの暦を保持している部族もある。

三六五日暦

図7は三六五日暦の碑文と絵文書の書体の例である。これにも頭字体と幾何体の二種の書体がある。

三六五日暦は、二〇日がひと月となる月が一八に、不吉な日とされワイエブとも呼ばれている五日がついてできる三六五日が一周期の暦である。この暦はハアブと呼ばれているが、本当の名はわからない。

ひと月は二〇日からなる。そして、各一日の表わし方は、月の名の前に0から19までの数字が順について表わされる。たとえば0ポプ、1ポプ、2ポプとなる。

二〇の数字といったが、正確にいうと、0から19までの数字ではなく、1から19までの数字と、便宜的に0とっているめがね型の文字が数字のかわりについて、合計二〇となる。このめがね型の文字は0ではなく、その月が支配の座につくことを表わしており、「着座の文字」とも呼ばれる(図8)。こういうところにマヤの思想の一端をみることができるかもしれない。時はそれぞれの神に支配されている。日の神、月の神、年の神といった神々が支配につく。ある期間支配し、次の神に支配の座をゆずる。その神が善い神であれば、その神が支配する期間はよい。悪ければ

絵文書



文頭字体



碑幾何体



- ポップ
- ウォ
- シップ
- ソツ
- セック
- シウル
- ヤシュキン
- モル
- チェン
- ヤシュ
- サック
- ケフ
- マック
- カンキン
- ムアン
- パシュ
- カヤップ
- クムク
- ワイエブ

図7 365日曆

その期間は凶である。

0から19までがふつうだが、二〇日目まで数えられることがある。その日は次の月の0の日、すなわち次の月が支配の座につく日でもある。これまで一二例ほど知られているが、とくにヤシユキン月のときが多い(表1)。

二〇日目にあたる文字は、のちに四章でみる、年を表わす「期間の文字」トゥンに接字のついたものである(図9)。ユカテコ語のトゥンにはいろいろな意味があるが、「終り」の意味もあり、この場合、その意味で用いられているにちがいない。

カレンダー・ラウンド

碑文時代には、二六〇日暦と三六五日暦が組になって一つの単位を作った。いいかえれば、一日を表わすのに二六〇日暦と三六五日暦の組が用いられていた。たとえば、昨日が3チクチャン8ケフとすると、今日は4キミ9ケフ、明日は5マニク10ケフとなる。4キミだけでは時の記録として意味をなさないし、9ケフだけでも同じように時の流れの一点を定めることにならないからだ。この二つの暦が組み合わさった暦は、二六〇と三六五の最小公倍数の一八九八〇日で一周期となる。この暦は果てしなく巡ることから、カレンダー・ラウンドと呼ばれている。

二六〇日暦と三六五日暦が組となって一日を表わすわけであるが、その組み合わせにはあるき

着座の文字



0 ソツツ

図 8



0 サック

月の終り トウンの文字



T548



1 エップ 20 ヤシユキン

図 9

通常	トゥン文字使用
19 ヤシユキン	19 ヤシユキン
0 モル	20 ヤシユキン
1 モル	1 モル

表 1

一つずつふえていく。たとえば今年の新年が3アクバル1ポプであるとして、三六五日たった来年は4ラマツト1ポプとなる。さらに年は5ペン1ポプであり、三年目は6エツナツプ1ポプとな

まりがある。図10に示したように、二六〇日曆と三六五日曆を齒車にたとえればわかりよい。三六五日曆が一回転したときには、二六〇日曆はすでに一回転し、さらに一〇五日進んでいる。よって、三六五日たつごとに、二六〇日曆の日はもとの日から五日ずつ先にずれていくし、また一三ある日の係数は一つずつふえていくことになる。三六五日曆が四回まわると、つまりマヤ曆で四年たつと、二六〇日曆の日のほうはおなじ日に戻る。しかし、係数は四ふえる。

いまのことをいいかえると次のようになる。たとえば、三六五日曆のある一日、1ポプを基準にとってみよう。三六五は二〇で割ると五あまるので、三六五日たつごとに1ポプと組になる二六〇日曆の日は五日ずつ先にずれていく。そしてその係数は、 $365 \div 13 = 28 \dots 1$ で一あまるので、

る。四年目にふたたびアクバルとなるが、係数は7となっており、7アクバル1ポプとなる。三六五日暦の月の係数と二六〇日暦の日の組み合わせにも、制限がおこる。三六五を二〇で割ると五あまる。ということは二六〇日暦のある日を基準にとると、四つの係数としか結びつかない。たとえばアクバルは、月の係数が1か6か11か16の月としか組み合わさらない。これらをまとめると表2のようになる。

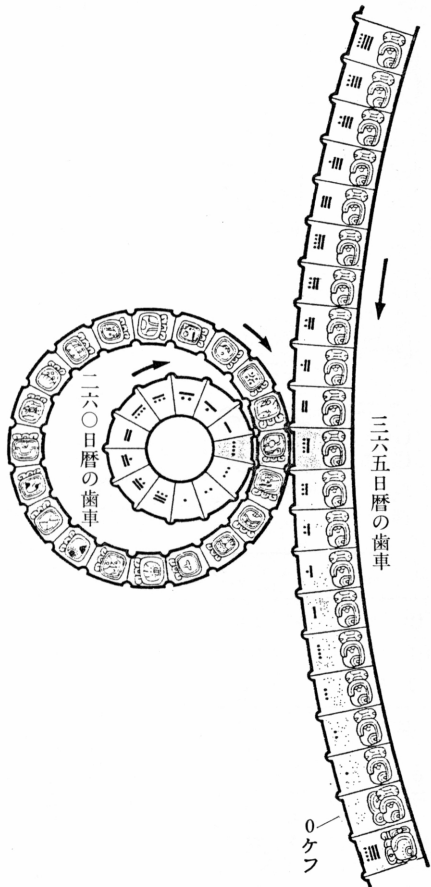


図10

260 日 暦 の 日	365日暦の月の係数
アクバル, ラマツト, ペン, エツナップ	1, 6, 11, 16
カン, ムルック, イシュ, カワック	2, 7, 12, 17
チクチャン, オック, メン, アハウ	3, 8, 13, 18
キミ, チュエン, キップ, イミシュ	4, 9, 14, 19
マニック, エップ, カーバン, イック	5, 10, 15, 0

表 2

表からわかるように、たとえば、キミはかならず4か9か14か19の係数をもつ月としか結びつかない。それゆえ、4キミ9ポプという日は存在するが、4キミ10ポプとか4キミ11ポプという日はマヤ暦には存在しない。もしそういう日があるとすると、それは刻んだ人のまちがいということができる。

このような結合関係は、碑文のまちがいを正すときばかりでなく、碑文の月日の一部が、風化したり浸食されたり破壊されて読みとれない場合の解説にも役に立つ。たとえば、日の文字のほうが消え、月の文字のほうが残っているとしよう。月の係数から四つの日のうちのどれかがわかる。月の係数が2か7か12か17のうちのどれかだとすると、日はカンかムルックかイシュかカワックのうちのどれかである。これらはひじょうに異なった文字であるので、一部が残っていると、すぐさま同定できる。

このように、月と日の結びつきにおこる制限は解説の役に立つことがあるので、知っておく必要がある。

これまでみてきたことをまとめておこう。カレンダー・ラウンドは二

六〇日曆と三六五日曆の組み合わせたものであった。二六〇日曆は、1から13までの数字と二〇の文字が順次組み合わさり、一まわりが二六〇日となる曆であった。三六五日曆は、0から19までの数字が一八ある月にそれぞれついて三六〇日となるものに、五日の不吉な日とされるワイエブがついてできる曆であった。

二六〇日曆を日、三六五日曆を月とみれば、私たちの現在使っている曆の月日に相当することになる。たとえば一月一日と私たちがいうのを、マヤ曆では4アハウ8クムクというのである。もちろん、その単位は異なる。私たちの月日が三六五日で一周するのと異なり、二六〇日と三六五日の最小公倍数の一八九八〇日で一周期となる。これをカレンダー・ラウンドといった。

ではたとえば西曆一九八二年にあたる、私たちがいう年のほうはどのようなであろう。マヤ曆にもそれにあたるものはちゃんとある。それを長期曆という。長期曆については四章にゆずって、曆の読みの問題にはいることにしよう。

曆の文字の読み方

曆の文字の読み方は慣用的にユカテコ語が使われている。曆をただ時の流れを記すものとみた場合、どんなふうと呼ばれていようと、仕組みさえわかっていたら問題はない。一九五〇年代まで、解説とは曆の仕組を説明することであった。おかげで私たちは曆の仕組については十

分わかっており、その暦を歴史的な解釈をする枠組として用いるのにもはやなんらの問題はない。しかし、文字を読もうとする場合、いいかえれば、言語的なアプローチをする場合には、いまでもかなりの問題が残っている。

言語的なアプローチの基礎になるのは、暦の文字と、ランダのアルファベットと呼ばれている二七の文字と三つの例である。

ランダは暦については、文字とともにその読み方を記していた。それは当時の文字の読み方を反映している。ランダの与えた暦の文字と、碑文や絵文書の暦の文字はひじょうによく似ているので、ランダの時代の読み方は、碑文や絵文書の時代の読み方とさほど変わっていないだろうと推測できる。ランダが与えた読み方を検討していけば、碑文時代や絵文書時代のその文字や読み方についての知見が得られるはずである。

暦の各文字とその表わす意味、読み方を検討していくと、いくつかの矛盾がでてくる。暦の読み方は慣用的にユカテコ語が使われているが、文字の構成の仕方とその読み方はかならずしも一致していない。ほんとうの読み方がどうであったかを知ることが、その文字の解説につながるばかりでなく、マヤ文字全体の解説に手がかりを与えるものとなる。というのも、暦に使われている文字は、暦として用いられるばかりでなく、そのほかの場合にも使われるからである。

暦の文字が暦以外に使われる例がいかに多いかを知るために、マヤ学の権威であった故 J・エ

リック・S・トンプソンが一九六二年に出版した『マヤ文字のカタログ』をみてみよう。

このカタログは、マヤ文字研究にはどうしても欠かせない重要なものである。マヤ文字の一つ一つに言及するとき、ふつうトンプソンのカタログ番号で記して、その文字をわざわざ描かなくてもよいことになっているほどである。いふなればマヤ文字について語るときの共通語のようなものである。たとえば、図11のカワックはT528とかく。Tはトンプソンのカタログの略号であり、528はカタログ番号である。一九六二年にそのカタログが出版されてから、さらに一〇〇あまりの新しい石碑がみつきり、ほとんど無視されてきた土器の文字の研究も進みはじめた。研究が進み、カタログの分類のまちがいや新しい文字もみつかってきたので、新しいカタログが必要になってきた。しかしまだそのような新しいカタログはできていないので、トンプソンのカタログの重要性は変わらない。

そのカタログには八六二の文字素がある。そのうちわけは、接字が三七〇、主字が三五六、頭文字八八、その他四八である。主字の総生起数は、一二四二五である。生起数の多い上位十番目までのなかに、暦の文字が六つもある。上位三十三までの生起数は六八四九で、全体の五五パーセントを占めるが、そのうちに暦の文字は、イミシュ、カワック、カーバン、キミ、ソツツ、アハウ、シュル、マニック、カン、ラマツト、チクチャンと一一もある。そのほか、上位三三文字のなかに、T528のカワックやT17のヤシュ、さらにはウォヤシップの一部に使われるT

552のように、暦の文字の一部に使われる文字素もあり、暦に使われる文字が暦以外に用いられることがいかに多いかがわかるであろう。それゆえ暦の文字の研究からわかる読み方が、これらの文字の解説に役立つことはもはや自明であろう。

二六〇日暦と三六五日暦は、ユカタンばかりでなく、メソアメリカの各地に残っている。それらが共通の起源をもっていることは、少し比較をするだけですぐさまわかる。数ある暦のなかでも一番参考になるのは、グアテマラ高地マヤに残っていた暦と、意味がよくわかっているアステカ族の暦であろう。

チアパスやグアテマラ各地に残っていた二六〇日暦の日の名前をみると、かなりの日がおなじ名であることに気づく。だがまったく異なる呼び方をされている日もある。

二〇の日のなかですべての言語に共通するものは、二番目の日イックである。ではイックにはどんな意味があるのだろうか。十六世紀の終り頃に書かれたというユカテコ語の最初の辞書であり、文字を読もうとするときもつとも参考になる辞書でもある『モトゥル辞典』をみてみると、イックのところには「風」とか「息吹」とかいう意味が書かれている。そのほかの言語の辞書でみて



T528
カワック

図11

みてもそうだ。では共通起源の暦をもっているといわれるアステカの暦はどうか。アステカ名ではエエカトルというが、表わす意味は風である。オアハカのサポテコ族の暦でも風を意味する。つまりどの暦でも風を意味する。マヤでは

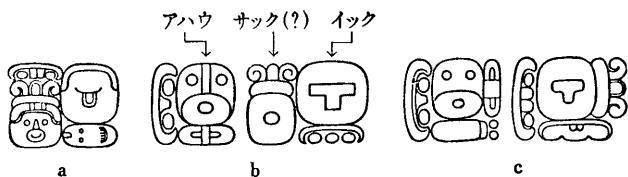


図12

風はどの言語でもイックであるので、暦の二番目の日はイックと呼ばれるのである。

ではこのイックの文字が暦以外に使われる場合の一例をあげてみよう。マヤのテキストには歴史が刻まれていることを証明したプロスクリアコフは、図12の文字群を、死を意味する文字とした。また『モトゥル辞典』には、

bini ik', binam ik' 死ぬ、魂が行ってしまう

とあり、死を意味する表現にイックが使われることがあることがわかる。しかし、死を表わすとみられる文字のイック以外の文字素は、『モトゥル辞典』にあげてある表現に一致しないので、ほんとうに死を意味するかどうかかわからない。だがともかく、イックには死に関する意味が含まれていることはわかる。

ところでこの例(図12)は、文字の書き方という点からみるとじつに興味深い。a、b、c いずれも少し異なるが、おなじ意味を表わす文字なのである。bでは、アハウとイックの文字素が、それぞれの文字の主字となっている。そしてサック(?)の文字素は前接字としてイックにくっついている。ところがaでは、アハウの文字素がサックの文字素に接中文字化され、cでは、

イックの文字素が接中字化され、主字に変わっている。このように、いろいろ書けるのである。接字が少しずつ違うのも興味をひく。

いずれにせよ、こういうふうにして、いろいろな辞書やいろいろな年代記や神話に残っている表現から、適切な読み方や意味を探す作業は、マヤ文字の解読法の一つといえよう。

『ポボル・ブフ』から

イックの場合、ユカテコ語の意味から文字の意味がわかって、しかもそれはほかの言語からも裏づけられた。二六〇日曆の文字については、ほかに、ユカテコ語の意味からは文字の成り立ちがわからないものや、またユカテコ語の意味さえわからないものもある。一つ一つの文字について検討していくと、かなりの紙面を費やさねばならないので、もう一例として、ユカテコ語の意味はわかるけれども、文字の成り立ちやほかの曆との関係がもう一つはっきり理解できなかったものが、そのほかの資料から理解できるようになった例をあげることにしよう。

チュエンということばは、ユカテコ語の辞書にはアフ・チュエン（工匠人）としてののっている。チュエンの文字の幾何体はひじょうに抽象化されており、なにを表わしているのかわからない。しかし頭字体のほうは、なにかの動物を表わしていることがわかる。ほかの言語では、この日はバツと呼ばれている。バツは猿である。それゆえ頭字体は猿を表わしていることがわかる。

このことは、アステカ暦のこの日にあたる日のオソマトリが猿を表わすことや、サポテカ暦でも猿を意味することばで呼ばれていることから裏づけられる。ではなぜユカテコ語ではこの日をチュエンというのであろう。これはキチエ族の神話『ポボル・ブフ』から理解できるのである。

『ポボル・ブフ』によるとこうだ。

フンバツツとフンチョウエンという双子の兄弟は、フンフンアフプーとシュバキヤロのあいだに生まれた。この二人は、異母兄弟であるフンアフプーとシュバランケーに猿の姿に変えられてしまう。この物語により、高地ではバツツという日がなぜユカタンではチュエンと呼ばれるかわかるのである。

このフンアフプーとシュバランケーが生まれてきた経緯がおもしろいので、そこから話を進めていこう。

フンバツツとフンチョウエンの親フンフンアフプーと、その兄弟ウクブフンアフプーが、地獄シバルバーの主フンカメーとウクブカメーに殺され、埋められた。この二人の兄弟と一緒に埋めるとき、フンカメーとウクブカメーはフンフンアフプーの首だけを切り落として、

「道端に生えている木にその首をつるしておけ」

といった。首がつるされると、それまで一度も実のならなかった木が、実でいっぱいになった。たちまちのうちに実がなったので、地獄の主たちは、

「だれも実を切ってはならない。だれもその木の下へ行ってはならない」といった。

ところが、ある少女がこの木のうわさを聞き、やってきた。その少女シュキックは、「ひゃー、この木の実はなんなのかしら。この木になっている実はおいしいのかしら。一つでもとったら死んでしまうのかしら。気を失ってしまふのかしら」といった。すると枝のあいだにあったフンフンアププーのどくろが、

「なにか欲しいのかね。木の枝になっている丸いものはどくろなんだよ。それが欲しくないのかい」

と娘に向かっていった。娘が、

「ええ、欲しいのです」

と答えると、どくろは、

「よろしい。それではお前の右手をお出し。いいかい」

「いいですとも」

と娘が答えてどくろのほうへ右手をさしのべると、とたんにどくろは娘の手につばをはきだした。そうして妊娠して生まれた子供が、フンアププーとシュバランケーであった。

シュキックはふしだらな女として地獄から追いだされたあと、フンバツとフンチョウエンが

一緒に住んでいた祖母のところへ行き、そこでフンアププーとシュバランケーを生んだ。

しかし祖母は二人を息子の子と認めようとしなかったし、フンバツツとフンチョウエンも二人を弟として認めようとはしなかった。フンアププーとシュバランケーからはなにも傷つけられるようなことはされていけないのに、彼らの心は、この二人に対する悪意にみちていた。

フンアププーとシュバランケーは、毎日吹筒をもってでかけ、射った鳥をもって帰るのだが、ある日、鳥をもって帰らないことがあった。祖母はひじょうに怒って、

「どうして鳥がないの。もっておいで」

すると二人は、

「鳥が木にひっかかってしまったのです。木に登る方法がないのです。兄さんたちが一緒に来て、鳥をおろしてくれればいいのに」

二人はフンバツツとフンチョウエンをこらしめる方法を考えていたのである。

「兄貴たちの姿を変えてやることにしよう。僕たちをずいぶんいじめたのだから、これくらいのことではしてやろう」

こうして二人は兄たちを、数えきれないほどの鳥がさえざっているカンテーという木のところへつれていった。兄たちは鳥をとろうと木に登っていったが、木はぐんぐん高くなり、幹はたちまちのうちに太くなった。フンバツツとフンチョウエンは降りようにも降りられなくなった。そ

こでフンアフプーとシュバランケーはいった。

「下帯をとって腹にくくり、先のほうを長くして、それをしっぽのようにたらすとうまく降りられるよ」

いわれたとおり下帯をひっぱると、下帯はたちまち尻尾に変わってしまい、フンバツとフンチョウエンは猿の姿になってしまった。

以上がおおよそその筋である。チュエン（チョウエン）とバツがどのように関係が深いかが、この『ポポール・ブフ』の一節から理解できよう。

フンバツとフンチョウエンは工芸に秀でていたのだが、それはチュエンの日の占にも反映している。チラム・バラムの『カワの書』や『マニの書』のチュエンの日の占は、

「木の職人、織物の職人が占の特徴。すべての芸術の師匠。人生はたいへん富、大吉。賢明」とある。チュエンとバツはおなじ意味のことばで、ユカタンではチュエンといい、高地マヤではバツということばを採用したとみることができる。

私たちはこのような方法により、日の文字の意味を知ることができるのである。たとえばイミシュの文字はスイレンの花を表わす。イックの文字は風とか息吹であった。文字の意味をみていくと、ジャガーとか猿、イグアナとか、熱帯低地に住む動物が多いことがわかる。二六〇日曆の起源は古く、モンテ・アルバンⅠ期（紀元前五〇〇〜二〇〇年）にすでにみられるのだが、このよ

うにみてくると、その起源は熱帯低地ということができる。

急速に失われつつあるマヤの暦

二六〇日暦は儀式暦、または神聖暦とも称されるように、日々の生活、儀式を支配する暦である。そんなところから、もとの形を残したまま、変化が小さいのかもしれない。

これが三六五日暦になると、呼び方はかなり違ってくる。だが、碑文時代の呼び方がどうであったかを探る手がかりは、こちらのほうが多い。

これらの暦は急速に失われつつある。たとえばイシル族の場合、一九四二年のリンカーンの『グアテマラのイシル族のマヤ暦』という論文には一九の月の名がすべて採録されているが、それから三五年後、筆者がイシル族の部落に行つたとき、ある四〇歳代の人は、

「うーん、じいさんは知っていたなあ」

といい、それから、なんとか二つ三つの月の名を思い出してくれたが、なにしろ使っていないものである。断片的な知識しかなかった。残念なことに、古いものが急速に失われている。ほとんどの部落で、マヤ文明に関するものは跡かたもなく消えてしまっている。

あるとき、私がケクチ語を習っていた女性が私のところに聞きにきた。マヤ文明の数字と暦について教えてくれと。彼女は純粋なマヤ人なのである。低地マヤ文明とかなりの関係があったは

ずのケクチ族の、それも大学生なのである。そんな彼女にマヤの数字体系や暦の仕組みを教えていくうちに、おかしな気分になってきた。日本人の私がマヤの暦や数字をマヤ人の子孫に教えている。おかしな気分を紛わすために、饒舌になったのかもしれない。ユカテコ語の数字の読み方と君たちの数字の読み方はこんなに似ているではないか。君たちは偉大なるマヤ人の子孫であるのに、どうしてなにも知らないのか、とたずねてしまった。

「インカ・ニン・ナウ」（知らないわ）であった。

彼らにとってマヤ文明とは、日本の文化が彼らにとって関係ないとおなじことではかないのである。こんな知識の断絶は文字をもった世界でおこりうるだろうか。彼らは文字をもっていない。これは文字を失ってしまったからおこりえたことなのかもしれない。文字をもっていた彼らの祖先の世界と現在は、別世界のようなのである。

このような現在のマヤ人たちから、文字に記された王たちの生活を想像することはむずかしい。しかし、暦や宗教儀式などの知識は、彼らのなかに脈々と受けつがれてきた。だから、残っていた暦の比較から、文字の意味や構成の仕方などが理解されるようになったのである。思えば、マヤ文明の謎を解くのは、彼ら自身が一番ふさわしい。しかし、彼らにはほとんどそんな余裕はない。だいたい一日に一ドルくらいしかかせげない彼らは、残念ながら、それどころではないので

ある。

ポプの文字

さて、三六五日曆の文字（五一ページの図7）は、ランダの記した文字（四七ページの図5）とかなり異なっているのにお気づきであったろう。

たとえば最初の月ポプをみてみよう。一番大きな違いは、ランダの文字には碑文や絵文書になり要素④がついていることであろう。しかもおなじ要素が二つある。もしこの要素④がポと読めるとすると、二つあるからポーポ（po-po）である。子音+母音+子音（CV C）というマヤ諸語の基本形態素が、CV+CVと書かれ、あとのほうの音節CVの母音は読まないとしたら、ポプ（pop）と読まれ、月ポプの読み方を記しているとみなすことができる。ちょうど日本語のかなのようなものである。

マヤ諸語の基本形態素CVCを表わすのに、音節文字CVの結合形CV+CVで表わされ、その場合、後の音節文字は前の音節文字の母音とおなじ母音をもった文字が選ばれる、つまり母音調和するという説は、ソ連の学者ユーリー・クノロヅフが提唱したものである。この説は、すべての場合に適用できるわけではないが、そういう例がマヤ文字資料中にあることは、現在では広く認められている。



[bu]-lu-k(u)

「11」

図13



ku-tz(u)

「七面鳥」



tzu-l(u)

「犬」



k'u-k'(u)

「ケツアル鳥」

たとえば図13の文字をみてみよう。左端の文字はドレスデン絵文書の一九ページにでてくる。この文字は、ふつうは点と棒で表わされる数11のかわりに描かれており、11を表わしている。11はユカテコ語でブルック(Bulck)という。この文字は三つの文字素からできている。それゆえ、ブルックを三つに分けて、bu-lu-kuと書くすると、左上の文字素は消えているがbu、右

上の文字素はlu、下の文字素はkuを表わすとみてよい。

図13の左から二番目の文字は、絵文書で七面鳥の絵とともにでてくる文字なので、七面鳥クツツ(kutts)を表わす文字と考えられる。左の文字素は、先にみた数11の文字の下の文字素とおなじであり、どちらもk(ku)と読めるので、その読みは正しいと考えることができる。

そうすると、図13の左から三番目の文字は、ツ(tzu)とル(lu)であるのでツル(tzu)と読める。ツルには犬の意味があるが、この文字が現われるのは犬の絵がある場所である。このようにみえてみると、これらの文字素の読み方は正しいことがわかる。

ポップの場合も、図13の右端にあげたケツアル鳥を表わす文字クツクとおなじように考えることができる。⊗はポ(po)と読めそうである。しかし、この文字素をポと読んですべての場合がうまく説明できるかという点、そうはいか

ない。この文字素は、マヤ人が好んで使う香の形にきわめてよく似ている。この香をポムというので、ポと読む読み方はかなり有力なのであるが、ポという読み方はまちがいかもされない。ランダの時代はポであったが、碑文や絵文書の時代は違った読み方であった可能性もある。しかし少なくともランダの記した文字はポプと読んで矛盾はない。ランダの時代には、日本語のかなのような役目をする文字があったとみてもよさそうである。

色の文字

三六五日暦の文字（五一ページの図7）は、いくつかの文字素が結合してできているものが多い。とくに色の文字がたくさんでてくる。ウォには黒、シップには赤、ヤシュキンには緑、チェンには黒、ヤシュには緑、サックには白、ケフには赤の文字素が、文字の構成素として生起している。これらの色の文字は、前世紀に解説がはじまってからまもなく発見されたものである。古来、色と方角は密接な関係があった。マヤの場合、赤は東、白は北、黒は西、黄は南と関連があり、緑は中央と結びついていた（図14）。この色と方角との結びつきは、碑文時代からスペイン人征服後まで、変わることがなかった。それゆえ、比較的簡単に解説されたのである。

この色の文字が暦の文字の構成素として用いられているのであるが、文字の読み方に色の名がでてきているのは、サック（白）とヤシュ（緑）とヤシュキンのみである。そのほかのウォやシ

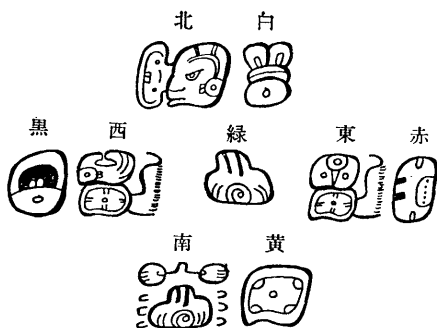


図14 東西南北と色の関係



T552
図15

ップ、チェンやケフは色となんの関係もない。それなのにどうして色の文字が使われているのだらう。これもユカテコ族以外の暦を調べてみればわかる。

ケクチ族の暦といわれているが、実際は Chol 族の暦とみられている暦の、ウォとシップにあたる月は、イカットとチャカットである。Chol 語の黒はイック、赤はチャックであるので、これらの月の名は黒十カット、赤十カットと分析できる。文字は黒十 T552、赤十 T552 であり、この構成の仕方は、Chol 語の月の名の構成とおなじである。それゆえ、T552 (図15) はカットと読めるのではないかと考えることができる。カットには「横または斜めにわたしたものの」の意味があり、偶然かもしれないが、文字の形をよく表わしている。

チェン、ヤシユ、サック、ケフの各文字は、T528 (図11) にそれぞれ、黒、緑、白、赤の文字素がついてできている。ヤシユとサックは緑と白の意味であり、ここで T528 をしばらく問題にしないと、暦の名と文字が一致する。

では、チェンとケフはどうなのであらう。これもほかの暦を調べてみれば納得がいく。カンホバ

ル族の暦では、チェン、ヤシユ、サツク、ケフにあたる月の名は、シホム (sihom) に黒、緑、白、赤がついている。チヨル語では、シホラ、ヤシユ、サツク、チャツクである。それゆえ、なぜ文字に黒、緑、白、赤の色を表わす文字素があるかが納得できた。つまりユカテコ語の呼び名が文字の表わしているものと違うのは、ユカテコ語では違った呼び名が使われていたところへ文字が導入され、そのまま自分たちが使っていた呼び名でその文字を読んだか、あるいは文字使用中になんらかの原因で呼び名が変わったかのどちらかのためであろう。

それでは、さつき問題にしなかった T528 の文字素はなんと読んだらよいのであろう。カンホバル族の暦にあるシホムと読めるものなのであろうか。それともチヨル族の暦でヤシユ、サツク、チャツクというように、読まれない文字素なのであろうか。T528 は暦として用いられる以外にも、たくさんの使用例がある。ところがそれらの使用例をシホムと読んで意味が把握できるかという点、そうはいかない。ではどのように読むのが正しいのか。一番有力な読み方は、のちにみるランダのアルファベットにあげられている、クである。この読み方は先の図13でみた例、ブルックやクツツという読みからも正しいと思われる。しかし暦の文字に使われているこれらの文字素の場合、クと読んでいい証拠はない。T528 は日の文字カワツクであり、また年を表わす文字としても使われる。だからこの場合、色を表わすのではなく暦を表わすしとして、色と区別するためにつけられた決定詞 (限定詞) のような働きをするものと考えるのが妥当である。

セツクの文字とマツクの文字

三六五日暦の文字は、文字の構成の仕方や文字の読み方などについて、いろいろなヒントを与えてくれる。いまあげた二つの例のほかにもまだまだたくさん述べたいことがあるが、そのなかからもう二例だけあげることしよう。

月セツクの文字は、碑文時代と絵文書時代では並び方が違う(図16)。絵文書におけるこの文字の音価は、ランダのアルファベット(図18)にあげられている。それによると、それぞれセとカと読める。マヤ諸語の形態素は閉音節であるので、*se-ka* は *sek* となる。ところが、碑文時代



図16 セツク

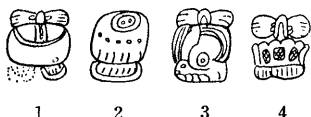


図17 マック

では反対に、*ka-se-X* である。碑文時代は *ka-se-X* であったことは、 Chol 語ではこの月を *カセウ* ということからまちがいないことと思われる。つまり、碑文時代と絵文書時代では、音位転換がおこり、それは文字にみごとに反映されていると解釈できる。マツクの文字を検討すると、マツクの表わし方には、*ma-ka* と *ma-ak* の二種類があったことがわかる。そして書き方には少なくとも四種類の書き方があったことがわかる(図17)。

図17の1、2、3は *ma-ka*、4は *ma-ak* で、ともにマツク

(mak)を表わしている。1と2の下の文字素はランダのアルファベットにある ka であり、3の下の文字素はその頭字体である。4の下の文字素は亀アック (ak) である。そして1、3、4の上の文字素は、ランダが記した例文にみられるマ (ma) である。2の上の文字素は、マ (ma) の音価をもつ別の文字素と考えられる。

それでは1のまん中の文字素 T617 はなにを表わすのであろうか。月マックの限定詞なのであろうか、それともマックという音価をもつ文字素なのであろうか。T617 は土器の文字としてよくでてくる。マックには「とじる、おおう、ふたをする」という意味があり、それと同源と思われるムック (muk) には、「埋める」という意味がある。土器、とくに彩色文字入り土器は、死者の副葬品であることが多い。それらは、死の世界や埋葬儀式に関係するものであることが最近の研究でわかってきた。そうすると、マックの意味に符合してくる。もし T617 がマックと読めるならば、図17の1の例は、T617の上下にその読み方を記す文字を添えたとみなすことができる。ポップでみたものとおなじような例が、碑文時代にもあったのではないかと考えることができる。

ランダのアルファベット

このように、文字に関していろいろな知見が暦の文字から得られるのである。暦の文字の研究

de las partes otro y assi viene a hacer un infinitum de uno
 se podria ver en el siguiente exemplo. Los quicre dezir loco
 y casaca con el, para escribirle con sus caracteres uniendo
 las nestras beas se entender que son dos letras lo escribieron
 ellos con tres poniendo a la aspiracion de la f, la vocal e,
 que antes de si trae y en esto no pareceran ningun cosa si
 quisieren ellos de su curiosidad. Exemplo. 

despues al cabo le pegan la parte junta. Ah que quicre dezir
 agna por la beas tiene a. h. ante de si lo ponen ellos al
 principio con a. y al cabo desta manera  Tambien
 lo escriben a partes de la voz y otra ma  Merays
 no pusierra aqui ni trahera dello sino por dar cuenta entera
 de las cosas desta gente. Memhah quicre dezir no quicre, ellos
 lo escriben a partes desta manera 

Signase se en a, b, c. 

De las letras que aqui faltan carece esta lengua
 tiene otras medidas de la nuestra para otras
 cosas q las ha menester y ya no usan para nada de sus
 sus caracteres especialmentre la gente mora q an aprendido
 las nestras

図18 ランダのアルファベット

から導きだされる読み方を、それらの文字が暦以外に使われている例に適用してみることは、解読の第二段階といえる。各文字の検討は、それらが生起したときにそのつど行なうことにして、ランダのアルファベットをこれからみていこう。

マヤ文字を読もうとする場合の手がかりとなるものにも、もう一つ、ランダのアルファベットと呼ばれているものがある(図18)。ランダは、二七のアルファベットとそれを使った例を三つ残した。しかし、この三つの使用例には二七のアルファベットにない文字が三つ含まれている。それゆえ、ランダは三〇のアルファベットを残したことになる。

文字はだいたいスペイン語のアルファベット順に並んでいる。最初の文字は亀(ユカテコ語でアック *ak*)、四番目の文字は道(ベ *do*)、六番目の文字は月セツクを表わしているとみられるところから、ランダはスペイン語式にアルファベットをアー、ベー、セーと読んでいき、インフオーマントは、その音をもつ文字、またはその

音を含む文字、またはその音に近い音をもつ文字を記していったと推測できる。

ランダの文字をみてまず気づくことは、aが三つ、bが二つなど、同じアルファベットに対し、二つないし三つの異なった文字が与えられていることであろう。おそらく、アーやベーという音価をもつ文字がたくさんあったので、それらを列挙した結果、そのようになったものである。

ランダの文字をもう少し詳しくわしくみると、アルファベットとしてスペイン語にあってもそれらに該当する文字が記されていないもの（たとえば ch, d, f, g, j など）がある。さらに、ユカテコ語に存在する音で文字化されていないものもある（t, tz, ch など）ことに気づく。こうみてくると、ランダが残したこれらの文字をアルファベットと呼ぶことは、あまりふさわしくないことがわかる。しかし、それらが音節文字であることはほぼまちがいないが、ここでも慣用に従い、ランダのアルファベットと呼んでおこう。

ランダの文字についてはいろいろな解釈がなされてきた。表音的アプローチというのは、ランダのアルファベットをもとにしている。

最初の試みはランダの書が出版されてからはじまった。ランダのアルファベットをもとにマヤ文字を表音的に解釈しようとしたその試みは、一九〇四年、その主唱者トーマスが自ら放棄したこと、失敗している。二番目は、一九三〇年代から一九四〇年代にかけて、言語学者ウォーフによって試みられた。ランダのアルファベットをもとにしたその試みは、ここでも失敗している。

解読史をみると、ランダのアルファベットをもとに解読しようとする表音的アプローチとその失敗、その反動としての表意的アプローチの台頭、この繰り返しのようにみえる。そのつどランダのアルファベットは、捏造品であるとか役立たずとか、いやランダのアルファベットこそ解読の鍵であるとかいう論が繰り返されてきたのである。

第三の試みは、一九五二年以来のクノロゾフの研究である。クノロゾフはランダの文字を解釈しなおして、マヤ文字に表音文字があることを立証した。その例についてはすでに六八〜六九ページでふれた。

ランダの文字はいまでも理解されているとはいいがたい。ランダの文字がうまく理解できないのは、その表わすものがなにかが同定できないためである。たとえば、二、三番目の a や、b の二番目の文字など、いったいなにを表わしているのかわからない。興味深い三つの例文も解釈が分かれている。しかしながら、ランダが与えた読みのうち、*ab* とか *bab* などは、たとえば月マツクの文字の解釈で示したように、それを適用することによって、文字を理解することができた。だから、ランダのアルファベットは十分に理解はされていないが、その読み方が適用される可能性はこれからおおいにあるわけだ。またその読みに近い音が適用されることもある。解読とは、文字どおり、解って読めることである。ランダの残した文字をよくおぼえておき、その文字ができてきたときには、そのつどランダのあげた音価、またはそれに近い音価をあてはめて、検討して

いくことにしよう。

マヤ文字の特徴

ここまでで、私たちはマヤ文字についてかなりたくさんを知った。そこでまとめる意味で、マヤ文字について少し考えてみることにしよう。

私たちの扱っている文字がマヤ文字であることはもう自明であろう。だが二、三例をあげてそれを確認しておこう。たとえば月ソツツはコウモリの文字であったが、ソツツはマヤ諸語で「コウモリ」を意味する。月ヤシュキンは、ヤシュとキンの文字から成り立っている。カーバンという日の文字は、カップという文字素からできている。カップには「大地、世界」という意味のほか、「はちみつ、みつばち」という意味がある。絵文書ではその両方の意味で使われている。たとえばマドリッド絵文書の一〇三〜一二ページのみつばちを扱った章に、その文字がみつばちを表わす文字としてでてくるし、ドレスデン絵文書の三〇ページや四二ページなどでは「大地、世界」という意味で使われている。

このように文字と言語が符合するところから、マヤ文字であることは疑いなのである。では、マヤ文字の特徴とはいったいどんなものであろうか。暦の文字の考察から、私たちは数多くの知見を得た。そこでいままでみたことでわかったことをまとめながら、マヤ文字とはどん

な文字なのかをみていこう。

まず、マヤ文字の多くは、二種類の同価の文字をもっていた。一つは幾何的、抽象的、図形的、象徴的ともいえる文字で、もう一つは人間や動物の頭を文字にしたものである。前者を幾何体といい、後者を頭字体と呼んだ。幾何体と頭字体の例は曆の文字のところであげたが、ここで一度整理しておこう。

幾何体と頭字体の関係には三つの型がある。図19の一番上の例は、幾何体と頭字体の形は異なるが、ともに共通の要素をもっている例である。これが一番多い。まん中の例は、一見したただけでは同価であることがわからない。しかし、いろいろな生起例から、意味を変えずに交替するところがわかったものの一例である。一番下の例は、幾何体の形を顔の形に変えただけのものである。こういう三つの型がある。

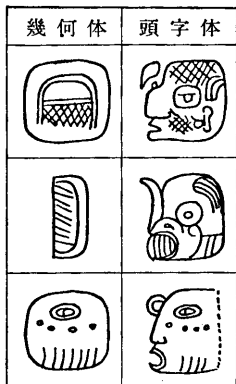


図19

幾何体と頭字体は、一方が抽象的な文字で、もう一方は具体的な文字、絵文字的な文字といえることができるかもしれない。発生的にはふつう頭字体のほうが先である。幾何体には左右対称、またはそれに近いものが多い。頭字体のほうは、ふつう顔は横向きで、しかも左を向いている。しかし正面を向いている字や右や上、または下

を向いている字もある。右側を向いている場合のほとんどは、テキスト全体の文字も反対向きで、通常の読み順である左上からとは反対に、右上から読まれる。しかし左向きの文字テキストのなかに、右や上、下を向いた字もある。左横向きの字を正字とすれば、これらは変体といえるが、正字とおなじ形をもつ文字の場合、たんに向きを変えたとみなすより、伝えるべきものやさすものの違いや、読み方の違いなどを表わそうとしたものと考えることができる。たとえば、図20の1の左側のカエルはウィナル(一〇〇ページ参照)を表わす文字であるのに対し、上を向いたカエルは「誕生」を表わす。図20の2の例の左は月ソツツであるが、ひっくりかえったコウモリは「期間の終り」を示す文字として用いられる。これらは同じ文字であるのに、向きが違うことで、異なった意味をもっている例である。

暦やランダのアルファベットから、マヤ文字にも表語文字や表音文字があることがわかった。色の文字や東や西、ヤシュキンの文字の構成素であるキン(日)は、それぞれマヤのことばを表わしているので表語文字である。ランダが与えた月パシュの文字がヒントになって解読されたパ(Ca)や、東(ラキン)のラ(La)を表わすアハウのひっくりかえった文字素などは、表音文字である(図21)。これらは音節文字である。ランダのアルファベットと呼ばれてきた文字も、実際はアルファベットではなく、音節文字と考えられた。

暦の文字の読みはユカテコ語で読めるものが多いが、ユカテコ語だけでは理解できないものも



1



2

図20 ウィナルとソツ



pax

「パシユ」



pa

「パ」



la-k'in-(il?)

「東」



la

「ラ」



ahau

「アハウ」

図21

諸語ではどうか、たえず問いかけながら音価を探していくことである。ユカテコ語に文字の表わすことばがあつて、ほかのマヤ諸語からも裏づけられればその読みはたしかである。ユカテコ語にはなく、ほかのマヤ諸語から音価が決定されることもある。こういう作業から、文字が

あつた。その場合、ほかのマヤ諸語をみることで解決がついた。このことは、マヤ文字を読もうとするとき、どういう態度でのぞむべきかを教えている。ランダが文字の読み方をユカテコ語で示しているように、また、絵文書の文字がユカテコ語で一番うまく解釈できることでわかるように、マヤ文字はユカテコ語に一番近い。しかしながら、記録に残る十六世紀以降のユカテコ語は、碑文時代の言語とおなじであるはずがない。のちにみる数字やテキストの構成からも、マヤ文字は低地マヤ諸語のことばで書かれたことは疑いない。それもユカテコ語に一番近いことばである。しかしユカテコ語そのものではない。ユカテコ語と変わらないものもあるが、もう消えてしまったものもある。変化してしまっているものもある。だから、一番賢明な態度とは、ユカテコ語を中心に読み方を考えていくことであるが、ユカテコ語だけではだめであり、かならずほかのマヤ

刻まれた当時の言語がいろいろな形態をとっていたかがわかってくるはずである。

文字の構成の仕方もいろいろな場合があることを知った。日本語のかなのような役目をするものもあった。くさび形文字にみられる限定符の役目をする文字もありそうなこともわかった。

文字は、ふつう、大きな文字素に小さな文字素がついて構成されている。それは三六五日程の文字をみればわかる。大きい文字素と小さい文字素の働きの違いは、いまだに問題のあるところで、一応、大きい文字素を主字、それについて生起する小さい文字素を接字と呼ぶことにした。トンプソンのカタログによると、接字は三七〇、主字は四九二あった。

接字と主字の読み順は、接頭字—主字—接尾字の順とみておいてよかった。そして接頭字が左と上にあるときは、左上端を占めるほうが先であり、接尾字が右と下の両方にあるときは、右下端を占めるほうがあとに読まれる、という原則もみた。

図 22 にあげた文字は、パレンケの大王パカルの名を表わす文字である。左下は楯を表わす表意文字とみなせる。楯はチマルとかパカルという。右はパカルの表音表記で、パーカーラ (Pa—ka—ri) と書かれている。簡単にいえば、左は意符、右は音符とみなすことができる (なお、左上の文字素はラウンズベリーによると、マフ キナ *mah kina* と読まれ、称号を表わす)。これは漢字の構成の仕方でいうと、形声にあたりそうだ。しかしこの場合、漢字に振りがなをつけた形により近いのかもしれない。まだまだ理解できて読める文字は少ないので、分類できるところまではいって

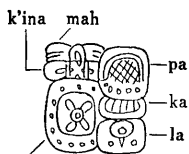


図22 バカル王

いないが、漢字の構成の仕方を分けた六書りくしよにあたるものが、マヤ文字にもあると思われる。

「誕生」を表わす文字

いままで述べてきたことは、一つの解読法を示している。この方法で解読された曆やアルファベットの文字は、その文字の正確な音価とはいえないにしても、本当の読み方につながる音が知られていた文字である。手がかりになる読み方があったので、その音と文字を検討していけばよかつたのである。これは有力な方法ではあるが、文字の読み方がわからないものにはもちろん適用できない。文字の読み方がわかつていたものは、曆や色や方角の文字くらいのものである。ほとんどの文字は読み方などわからない。わからないほうがふつうである。

しかし、読み方がわからない文字でも、読める場合がある。マヤ文字は絵文字的性格の強い文字である。なにを表わしているのか十分わかる文字も結構多い。もし文字がなにを表わしているのかわかるなら、その文字の表わすことばをマヤ諸語から探せばよい。たとえばジャガーが描かれていれば、マヤ諸語のバラムという読み方を与える、という作業を行なう。だがこれだけでは読めたことにはならない。そうした文字がいろいろある場合に用いられていたり、違った使い方の例がある場合、その一つ一つの場合に、そうして得られた読み方をあてはめて検証しな

ければならない。

一つひじょうに美しい例をあげてみよう。図20の1の左に示した文字はカエルの文字である。このカエルの文字はウィナルの文字として用いられる。その右のカエルが上向きになった文字のほうは、プロスクリアコフがイニシアル・デートの文字としたもので、「誕生」を表わすと考えられていた。「カエル」はツェルタル語でポコックという。チヨル語ではシュポコックまたはシュペケックといい、チヨルティ語ではペクペックという。マヤ祖語はポックまたはペック(**poq/peq*)と再構できる。一方、「月」はケクチ語やポコムチ語ではポという。おそらくマヤ祖語ではポック(**poq* または **poq*)であったと思われる。もう一つの「生まれる」は、ポコムチ語ではポキック(*poq'ik*)という。キチエ語のポコフ(*poq'oh*)にも「生まれる、芽をだす」などの意味がある。つまり、「カエル」と「月」と「生まれる」は、同音異義語とみなすことができる。しかし、正確にいうと違う。「カエル」は *poq* であるのに対して、「生まれる」は *poq'* であるからだ。

p は *q* の声門閉鎖音で、よく似ているが、違った音である。*p* と *q* をマヤ人は絶対に混同することはない。だから正確にいうと、同類音異義語である。*p* と *q* は違った音なので混同してはいけないのだが、この場合は許されたにちがいない。そう考えないと、「カエル」の文字が「月」や「誕生」を表わす文字として用いられた理由がわからない。カエルが上向きになっているのは、

「誕生」を表わすためであり、「月」に用いられるカエルと区別するためにそうされたと解釈できる。

文字がなにを表わしているのかわかるものの解読方法について述べたが、文字が表わすものさえわからぬものもある。そのような文字の意味を把握するためには、まず、生起位置が重要である。生起位置により、動詞か名詞の推測がつく。文字テキストに付随して場面が描かれていると、なにについて記しているのか推測できる。記された曆の日の間隔から、文字の意味が推測できることもある。いままでのところ、このような方法により文字が解読されてきた。それらの例は、テキストを解釈していくときに述べることにしよう。

こういうふうにして、私たちのマヤ文字に対する知識は豊かになってきた。しかしながら、十分にマヤ文字についてわかっていないわけではない。そこで少し別な観点からマヤ文字について考えてみよう。

マヤ文字の数は、現在でも正確にいうことはできないが、だいたい八〇〇〇字ある。この数字からみて、マヤ文字は、アルファベットの体系をもつということはできないし、また音節文字だけということもできないであろう。表意文字体系としたら少なすぎる。約八〇〇〇字という数字からは混合体系の文字とみなすことができる。私たちはすでに表音文字と表語文字の存在を確かめた。表意文字については、その定義があいまいなため、表語文字ということばが用いられるようにも

なつたのであろうと思うが、一定の意味を表わす文字としたならば、もちろんそのような文字も存在する。いろいろな意見も分かれているが、マヤ文字がこのような混合体系であるということは、もはや疑いを入れないものであろう。ちょうど日本語の文字体系によく似ている。マヤ学の泰斗マイケル・コーがいったように、マヤ文字の研究には日本人が一番向いているのかもしれない。たしかに、アルファベットしか用いない欧米語の文字体系に比べればるかに複雑な文字体系をもつ日本人は、欧米人より有利かもしれない。マヤ文字を解読しようと思えば、マヤ文字やマヤ諸語を知る必要があるわけであり、そう簡単にはいくまいが、しかし、少なくとも、その文字感覚というものは役に立つにちがいない。また役に立ててこそ、あまり進展のないマヤ文字解読に、なんらかの新しい手がかりを与えることができるにちがいない。

マヤ文字を解読するためには、数字とか長期暦とか、まだまだ知っておかなければならないことがたくさんある。私たちは、日本人がマヤ文字解読に向いているというこのお世辞を信じて、もうしばらくは基本的なものをじっくり学んでいくことにしよう。次章は数字である。